

My Personal Comments on the Hong Kong Cinema "Turn Left Turn Right"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2005-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松村, 茂樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3763

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



研究ノート：

『ターンレフト ターンライト(向左走 向左右走)』私感

My Personal Comments on the Hong Kong Cinema
“Turn Left Turn Right”

松 村 茂 樹

映画『ターンレフト ターンライト』

香港のジョニー・トー（杜琪峰）、ワイ・カーファイ（韋家輝）共同監督『ターンレフト ターンライト』（中文題：『向左走 向左右走』・2003・香港）を観た^[註1]。台湾の絵本作家・ジミー（幾米）の絵本『向左走 向左右走』（1999・格林文化/邦訳に宝迫典子訳『Separate Ways 君のいる場所』・2001・小学館がある）を原作にしたコメディ・ラブストーリーだ。

ストーリーはこうだ。金城武演じる売れないバイオリニストのジョンと、ジジ・リョン（梁詠琪）演じる翻訳者のイブは、古いアパートの壁一枚を隔てた隣同士だった。でもジョンはアパートの右側の玄関から出て、必ず右側へ行く。そしてイブはアパートの左側の玄関から出て、必ず左側へ行く。だから顔を合わせることがない。そんな2人が偶然、公園で出会い、言葉をかわす。そして、学生時代に出会い、互いに魅かれあいながらも、名前すら知らないまま、互いの学生番号のみを記憶していた相手だということがわかる。ところが急に大雨が降り出し、二人はあわただしく電話番号を交換して別れた。だが、電話番号を書いたメモが、雨でにじんでわからなくなっており、2人とも間違い電話をくりかえす。そして、共に間違っ「快餐88」という食堂に電話をかけた2人が、ついでに出前を頼むと、配達に来たシャオホン は、ジョンに一目ぼれしてしまい、2人が互いを探していることに気づくが、知らないふりをする。また、イブは、むかしから好きだったという医者 のフーに求愛され、迷惑する。ジョンに相手にされないシャオホンと、イブにきらわれるフーは、結託して2人の邪魔をしているうち、恋が芽生える。そして、2人にチャンスを与える。そのおかげで、2人は電話で話すことができ、突

如起こった地震によって、隔壁が崩れ、2人は再会がかなうのであった。

原作改編の必要性

原作のストーリーはもっと単純である。学生時代に出会っていたということはないし、シャオホンやフーも出てこない。原作を改編したことについて、監督の一人・ジョニー・トーは、インタビューの中で、「脚本の改編はワイ・カーファイが主に担当しましたが、私たちには、本の中のものはなるべく残そうという共通認識がありました。ですが、映画化にあたり、原作と何もかも同じというのは不可能です。たとえば、本の中では四季の変化が非常に鮮明ですが、アジアではとりたててはっきりしているわけではありませんし、撮影時に場面を作れるかどうかも考慮しなければなりません。また、本の中で設定されている世界は非常にヨーロッパナイズされていますので、アジアで撮影するにあたっては、あのようなシーンを作るのはとても難しいのです。しかも、私も原著中のデザインを模倣したいと思っていませんし」と述べたが、さらに、それでも映画と原著には関連があり、観客が映画館であるシーンを観て、原著中の絵を思い浮かべてもらえれば、と述べたという^[註2]。

また、2003年10月26日開催の「広州大学生电影节・杜琪峰電影研討会」では、改編は「市場の需要」からであり、「商業電影」は観客にわかってもらわねばならない、とした上で、シャオホンとフーを入れたのは、娯楽性を加えるためであり、現に、上映以後、香港、台湾の観客の反応は共によかったと述べた。さらには、ジミーの原著には多くの語られない部分が残されており、読者に想像させようとしているが、「商業電影」では、はっきりしない部分もはっきり語らねばならない、としたという^[註3]。これは「商業電影」に携わる者の本音であり、達観であろう。

原作者の意にかなう

では、原作者のジミーは、改編をどのように思っているのでしょうか。彼はインタビューに答えて、次のように述べている。「香港の映画監督・ウォン・カーウアイ（王家衛）とジョニー・トーがやってきた時（ウォン・カーウアイは彼の絵本『地下鉄』映画化をプロデュースしている^[註4]）、光栄すぎて不安に思いました。「これは本当なのか？可能なんだろうか？私のあんな数ページにすぎないものを？あなたはなぜ興味を持ったのか？」とね。これ

は現実でしたが、心の中には多くの疑惑がありました。契約書にサインする段になって、私はやっとこれらが本当のことなんだと信じたのです。そして、映画化を待つ間に、期待がふくらみ、主人公の男優は？女優は？と、うっとり思いめぐらせたりしました。『ターンレフト ターンライト』は比較的私の絵本にあわせて作られており、なおかつ、この作品そのもののストーリー性も比較的強いですし、この映画を観た時の感動は（『地下鉄』に比べて）多かったですね。監督がいかにして平面的なものを現実と結合させているのかを、驚きをもって見ることができます。その上、脚本がとても巧みに書かれており、私が本の中に描ききれなかった多くのものを、描いてくれていますし、基本的には、とてもまとまりがあり、みなさんに観ていただくにふさわしい映画となっていますので、微笑みを浮かべつつ観、そして感動していただけのではないのでしょうか^[15]。

ジミーは、これに続けて、映画『地下鉄』に不満の意を表しているので、映画『ターンレフト ターンライト』への、こういった肯定は、決してリップサービスではないと思われる。しかも、ジョニー・トー監督の「語られない部分」を「はっきり語」という方針を、「描ききれなかった多くのものを、描いてくれて」といっていると、極めて好意的にとらえており、この映画は、少なくとも原作者と監督の息が合っているという面では、成功作と言えるのではなかろうか。

筆者の“私感”

娯楽性を加えて「商業映画」にするため、監督が改編した部分の最たるものが、学生時代にジョンとイブが出会っていたとしたこと、およびシャオホンとフーを登場させることであったことは前述の通りである。ただ、この部分に混入されているある要素が、少なくとも筆者のある“私感”を刺激してしまったのである。

ジョンとイブはお互いの学生番号（ジョンは763092、イブは784533）のみを覚えており、ラスト近くの場面でも、お互いの番号を呼んで探しあう。また、シャオホンが勤めている「快餐88」の電話番号は24831597である。こういった数字が出てくると、筆者はどうしてもウォン・カーウアイ監督『恋する惑星』を思い出してしまふ。警官223とか633とか、1994年5月1日という日付とか……。どうしてもメタファーを勘ぐってしまうのだ^[16]。

そもそも、なぜ『ターンレフト ターンライト (向左走 向右走)』なのであろうか。なぜわざわざ「左」や「右」にするのであろう。「左 (サヨク)」に行く癖のあるイブは中国なのではなかろうか。「右 (ウヨク)」に行く癖のあるジョンは台湾なのではなかろうか。原作では、イブは紅い帽子に紅の縞模様のマフラーをしているし、映画と同じ紅い傘も持っている。そして、映画のポスターの「左」字は紅色だし、映画の中で、フーに「あなたは復旦大学の後輩じゃないか！外国語学部の」と言わせている。復旦大学は中国上海にある大学ではないのか。

さらに臆断にすぎるのを承知で言うなら、「快餐 88」の「88」とは、李登輝が総統になった 1988 年ではなかろうか。24831597 の下 2 桁は香港返還の年ではなかろうか。また、イブの学生番号からジョンの学生番号を引くと 21441 になるが、この下 2 桁は太平洋戦争開戦の年であると共に、共産系新四軍と国民軍が衝突し、国共内戦がはじまった年でもあるのではなかろうか。

壁ひとつ隔てているだけで、ごく近くにいるのに、「左」に行く癖のために、「右」に行く癖のために、出会えないイブとジョンが中国と台湾のメタファーであるとするなら、ジョンを台湾出身の金城武が、イブを中国返還なった香港出身(本籍は広東新会)のジジ・リョンが演じるのも、また理にかなっていよう。

解釈の可能性

筆者の“私感”は、ひとつの解釈にすぎない。ただ、ジミーのインタビュー記事を探しているうち、次のような前書きのある記事を見つけた。「清新なる“ジミー台風”(台風と台湾からの風をかけている)が、政治の垣根を越え、台湾島から大陸に吹いてきて、大陸の都市男女の心を占拠した」^[註7]。これは大陸、つまり中国が台湾のジミーに向ける視線である。中国と台湾には、やはり「政治の垣根」が存在するのが現実だ。中国、台湾、そして香港の人々は、このことを意識しないですごすわけにはいかないことも、確かなのではなかろうか。

ジミーの原作では、最後、2人を隔てていた壁が、大きなハンマーとタガネによって、打ち壊され、穴があげられている。ベルリンの壁を想像させないでもない。また、映画では前述のように、地震が起これ、壁が崩れる。そして2人は一緒に暮らす。この崩壊する壁を、「政治の垣根」と見るのが筆

者の“私感”なのである。

そして、さらに、台湾のジミーが「描ききれなかった多くのもの」の中に、筆者の“私感”があり、それを香港の監督が「はっきり語」ろうとしていたとしたなら、この映画の意義は、いっそう大きなものになるのではと、筆者は想像をたくましくしている。

- [注1] DVD『向左右走 向左右走』(2003・広東音像出版社出版発行、広州環亞音像發行有限公司經銷)による。なお、2004年10月30日～12月3日、新宿シネマミラノでロードショー公開された。なお、本作は、レイנטツリー・ピクチャーズ提携、ミルキーウェイ・イメージ(銀河映像(香港)有限公司)制作、アメリカ・ワーナーブラザーズ配給の中国語映画第一作。
- [注2] 「杜琪峰跟着直觉走否認“幾米”是票房保証」『瀋陽今報』原載、2003.10.13付『新浪網』「影音娛樂」<http://ent.sina.com.cn/2003-10-13/0933213876.html> 2004/12/05 (プリントアウトの日付、以下同)
- [注3] 謝曉、曾歲春、胡永根「杜琪峰詳解商業電影：改編是讓觀眾看懂」『南方都市報』原載、2003.10.27付『娛樂星聞』<http://ent.tom.com/1002/1011/20031027-58512.html> 2004/12/05
- [注4] 映画『地下鉄』(2003・香港)は、ウォン・カーウアイ(王家衛)総製作、ジョー・マ(馬偉豪)監督、トニー・レオン(梁朝偉)、ミリアム・ヨン(楊千嬅)主演、上海電影集團公司、香港沢東電影有限公司制作。広州音像出版社出版、広東泰盛文化傳播有限公司総經銷のDVDが発行されている。
- [注5] 「幾米：幸運兒的煩惱」2004.07.16付『江河源熱綫』「文化頻道」<http://www.qh.cninfo.net/news/wenhua/040716195947.html> 2004/12/05
- [注6] 『恋する惑星』のメタファーについては、拙稿「研究ノート：なぜジョウ・シュン(周迅)なのか?—『ハリウッド★ホンコン』私感」『コミュニケーション文化論集』第2号・2004.3.6・大妻女子大学コミュニケーション文化学会 所収 で触れた。
- [注7] 李楠「幾米專訪：小資甚麼意思？」2002.08.23付『新聞週刊』<http://www.chinanewsweek.com.cn/2002-08-23/1/294.html> 2004/12/05